2026年度日本高等教育開発協会課題研究申請書（再申請）

2026年6月9日

Ⅰ．研究名称

IRにおけるAI利活用の類型化と実践指針の策定－高等教育開発とIRとの接続強化に向けて－

Ⅱ．研究代表者

坂本規孝（広島市立大学）

Ⅲ．研究組織

メンバー：坂本規孝（広島市立大学）、藤本正己（山口大学、準会員申請中）

アドバイザー：竹中喜一（近畿大学）、市原英行（広島市立大学、非会員）

Ⅳ．研究期間

2026年度及び2027年度

Ⅴ．研究の背景と目的

近年、日本の高等教育では、教育の質保証の観点から高等教育開発（ED）への期待が高まっている。学修の過程や成果の可視化を担うIRにも注目が集まる中、EDとIRの連携強化は、教育の質保証に資する。一方、日本のIRは人事異動を伴う事務職員がIR担当者になるなど、IRの知識や技能の蓄積に課題を抱えている（近藤ほか、2020）。

その中で、データ収集・前処理・分析・報告という特定の業務プロセスで実施（中井ほか、2013）されるIRは、AIとの親和性が高い。AIの可用性が向上しているものの、IR担当者がAIを利活用する方法、リスクやその対処法は十分整理されていない。

そこで本研究では、EDとの連携を前提に生成・応答といったAIの特徴に着目して利活用の方法を類型化するとともに、リスクやリスク軽減を踏まえた実践指針を策定する。個別のAI製品ではなくAIの利活用の方法と類型に着目することで、AIが日々進展する中で研究成果が追い付かないというタイムラグの問題の解消を図る。

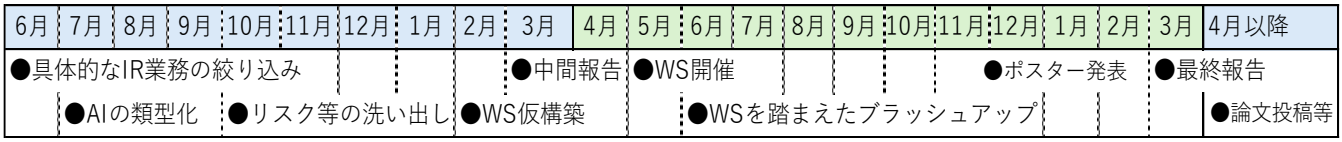
本研究の新規性は、IRでの利活用を目指してAIを類型化する点にある。その成果は、EDの高度化やIRの発展にとどまらず、高等教育全般におけるAIの可能性を明らかにすることが期待できる。

Ⅵ．研究の計画

本研究は、EDとの連携を前提に、IRでAIを利活用する方法の類型化と実践指針の提示を目的として、2年間で段階的に実施する。

1年目は、対象とするIR業務を絞り込んだ上で、文献調査、研修会への参加、IR担当者へのヒアリングを通じて、利活用の方法やリスク等の情報を収集・分析する。その上で、AIの利活用の方法を類型化し、そのリスクや軽減方法を抽出する。これらの成果に基づいてIR担当者対象のワークショップ（WS）のプロトタイプを構築し、中間報告でのフィードバックを経て、内容の精緻化を図る。

2年目は、構築したWSの実装を通じて、研究成果の発信と参加者へのアンケート・ヒアリングを通じて有効性と課題を把握する。また、ポスター発表による外部の意見を踏まえた多角的な検証も行う。最終的には、EDに資するIRの実践に向けたAIの利活用の方法の類型化と実践指針を提示する。なお、EDとIRの観点から竹中氏、AIとIRの観点から市原氏にそれぞれアドバイザーをお願いし、研究の理論的妥当性と実践的有用性の向上を図る。



Ⅶ. 研究経費の計画

年度	費目	概要	金額	計
2026	旅費	IR担当者ヒアリング ・41,000円：広島-海浜幕張、宿泊なし ・45,000円：新山口-海浜幕張、宿泊なし	86,000	**96,000**
	書籍	4冊程度	10,000	
2027	旅費	①WSの試行 ・21,600円：広島-京都、宿泊なし ・29,400円：新山口-京都、宿泊なし ②成果のポスター発表 ・2027年度大学教育学会課題研究集会を想定（場所未定のため東京周辺と仮定） ・40,000円：新山口-東京、宿泊なし	91,000	**96,000**
	その他	WS会場費（キャンパスプラザ京都）	5,000	

Ⅷ. 成果の公表方法

JAED年次大会での中間報告と最終報告に加え、『高等教育開発』等に投稿し、成果を広く公表する。また、1年目の研究成果を踏まえたワークショップを2年目に開催し、研究成果の発信と妥当性の検証を行う。更に、関連学会等でポスター発表を行い、研究成果の発信と専門家からのフィードバックを得る。将来的にはJAEDにおけるプログラム化も検討する。